



## 第一回ブループラネット賞

---

受賞者記念講演会並びにシンポジウム報告書

平成4年9月25日 会場：ニューピアホール

## 第一回 ブループラネット賞 受賞者記念講演会並びに シンポジウム報告書発行にあたって

---

この報告書は、第一回ブループラネット賞表彰式関連行事として1992年9月25日に東京、芝浦のニューピアホールで開催いたしました受賞者記念講演会並びにシンポジウムの内容をとりまとめたものです。

表彰式典を単なるセレモニーに終わらせることなく、これを機に多くの人々が地球環境問題を正しく認識し行動するきっかけになれば、との思いからこの催しを企画いたしましたところ、幸い多数の方々のご関心とご支援を得ることができ、成功裡に開催することができました。

講演会並びにシンポジウムでの各先生方の発表、討議でのご発言の中には、多くの示唆や提言が含まれており、催しにご参加されなかった方々ともこれらの有意義な情報を共有化したいとの主旨でこの報告書を作成いたしました。

シンポジウムで取り上げたテーマ「未来への遺産——環境と調和する新たな文明の創造に向けて」は、とかく海外からは資金提供と技術のみに集中しがちな環境問題での日本の貢献のイメージに対し、人文・社会科学の分野から知的主張を世界に向けて発信したいとの、少々気負った意気込みもありました。また、当日、「地球環境問題と人類の存続に関するアンケート調査」の結果も発表しましたが、これも同様の思いから実施したものです。本報告では、その結果については極く概要のみ触れておりますが、詳細は別途作成いたしました「アンケート結果報告」をご参照いただければ有難いと存じます。

いずれにしましても、当財団として初めての試みであり、多々不備もあろうかと存じますが、ご高覧の上、ご叱正いただければ有難いと存じます。

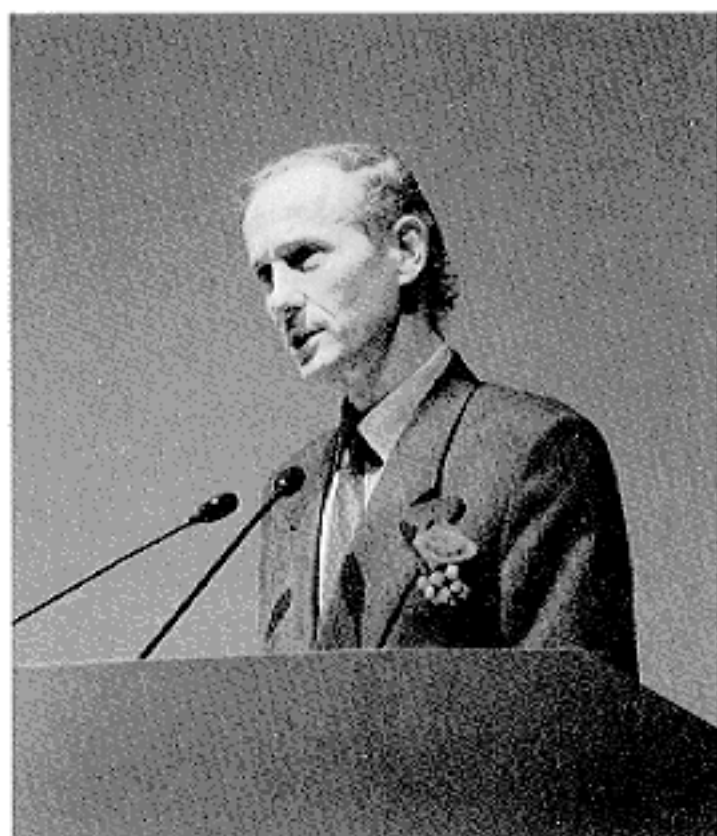
1993年3月

財団法人 旭硝子財団

## 目次

<b>第一部 受賞者記念講演会</b>	<b>3</b>
学術賞 受賞者紹介	4
学術賞 記念講演要旨	5
「気候モデルによる温暖化の予測」	
真鍋淑郎博士	
推進賞 受賞者紹介	8
推進賞 記念講演要旨	9
「サミット後のIIEDの活動方向」	
国際環境開発研究所 (IIED)	
<b>第二部 シンポジウム</b>	
<b>「未来への遺産——環境と調和する新たな文明の創造に向けて」</b>	<b>12</b>
「地球環境問題と人類の存続に関するアンケート調査」結果概要報告	13
基調提言	16
コーディネーター	
広瀬弘忠（東京女子大学文理学部教授）	
パネリスト提言	
「地球環境の冬」を生きるモデル	19
大江健三郎（作家）	
環境革命の必要性	21
石弘之（朝日新聞社編集委員）	
「メタボリズム文明」の創造	24
佐和隆光（京都大学経済研究所所長）	
人間・自然・科学技術の関係	27
中村桂子（早稲田大学人間科学部教授）	
提言へのコメント	31
質疑応答	33

# 第一部 受賞者記念講演会





## ブループラネット賞 推進賞 受賞者紹介

### 国際環境開発研究所 (IIED) (英国)

受賞業績 「持続可能な開発の現実に向け、科学的調査研究と実践活動を通じ、多くのブレークスルーを達成してきたパイオニアワーク」



- 活動歴
  - 1971年 バーバラ・ウォードらにより設立。
  - 1975年 UNEPの援助の下に「アーススキャン」を発足。
  - 1985年 世界資源研究所と共同で「World Resources Report」(隔年発行)を制作。この頃から、プロジェクトごとの具体的解決策に力を入れるようになる。
  - 1988年 政府やNGOへの支援、指導・訓練を行なうIIEDフィールド・サービス部を創設。英国のODA実施に要員を派遣する協定を英国政府と結ぶ。
- IIEDスタッフ 現在、環境専門家約40名、支援スタッフ約20名。チェアマン：サー・クリスピン・ティッケル、所長：リチャード・サンドブルック。

1992年6月にブラジル、リオデジャネイロで開催された国連環境開発会議では「世界の持続的開発」が中心課題となり、環境保全と経済開発に関する様々な議論が成されたことは記憶に新しいところであり、多くの人が指摘する通り、その実現の方法については必ずしも世界の合意が形成されたとは言えませんが、地球が破局を迎える事なく恒常性を維持し、人類がその幸せを追求してゆくには、環境保全と開発の両立という極めて困難な課題について、研究と実践活動が続けられなければならないことは明らかです。

ところで、この「持続可能な開発」の必要性を世界ではじめて訴えたのは故バーバラ・ウォード女史ですが、彼女こそ今回ブループラネット賞推進賞の第一回受賞者となられた英国の国際環境開発研究所(IIED)設立の立役者であります。1972年に、このウォード女史が同研究所のプレジデントに就任され、彼女の信念を実践に移すための活動が開始されました。

以来20年に亘り、IIEDはこの偉大な先覚者の思想を厳密な科学的研究と実践活動を通じて実現すべく、地道な活動を続けてこられました。設立後10年程の間に出版された研究書の中で「Banking on the Biosphere」は多国間、二国間の環境援助機関の活動のあり方に革命をもたらす起爆剤となりましたし、「A low-energy policy for United Kingdom」はヨーロッパのエネギー政策をサブライサイドからデマンド主導の考え方に転換させてきました。又「Shelter need and response」は都市の危機を予測し、「The management of the Southern Ocean」は南極の領有権問題の顕在化とその危険性を予見しました。このようにIIEDは常に環境と開発のあり方やその方向性を示すコンパスの役割を果たしてきたのであります。現在に至るまでの道のりは決して平坦ではなく、途中、組織崩壊の危機も経験されたと聞きますが、関係者のご努力によりそれを乗り越え、設立者の思想——人は人類全体のことを考えに入れることなくして、環境をケアしてゆくことはできない——を原則として、その実践に邁進してこられました。

さて、IIEDが現在取り組んでおられる活動をいくつかご紹介しますと「乾燥地プログラム」「持続可能な農業プログラム」「人間居住プログラム」「南のネットワークプログラム」「気候変動と開発プログラム」「環境経済プログラム」「森林と土地利用プログラム」など極めて多岐多彩であり、その活動範囲も先進国からアフリカ、アジア、ラテンアメリカ等に及んでいます。いずれも「地球的規模で考え、足許からの行動を——Think Globally Act Locally」をその活動理念とし、それぞれの地域に密着した環境と開発の両立の研究、実践を目指しておられます。

「我々は熱帯雨林を直接守ることはしない。その代わりに、その政府に対し森林保全と持続可能な農業を推進すれば森林伐採より利益をもたらすことができるということを示すのだ。我々は飢えに苦しむ人々に直接食糧を送ることはしない。その代わりに、農業と乾燥地プログラムを通じてどうしたら小規模農業で食糧の増産が可能かを政府や農民に示すことにより、サヘルを援助するのだ。我々は第三世界のスラムの人々に直接お金を送りはしない。その代わりに、我々はその国の政府や市民グループと共に、そこをより安全で健康かつ繁栄する街に変えるよう支援するのだ。」

これはIIEDのチェアマンであるサー・クリスピン・ティッケルが、IIEDの創立20周年に作成した「20:20 Vision」の巻頭で述べられた言葉ですが、まさに、これから人類が取り組むべき環境と開発のあり方を示唆するものであり、第一回ブループラネット賞推進賞にふさわしいものであります。

## 推進賞 記念講演要旨

### 「サミット後のIIEDの活動方向」

#### 国際環境開発研究所 (IIED)

先般、リオで行われました国連環境開発会議 (UNCED) 閉会后、世界の新聞の反応は概して否定的なものばかりでした。その大半が、大気や熱帯雨林、そして生態系の保護に関して何ら具体的な合意がなされなかった、この会議は失敗だったと述べられたものでした。しかし、IIEDはこれらの見方には少なくとも全面的には賛同しません。私達にしてみれば、会議の準備プロセスそのものが、すでに一つの成功であったのです。この会議が開催されたことで、今後環境問題が国際的な場で常に討議される議題となったということ自体が、大きな希望と前向きな姿勢を残してくれた点で、意義のあるものだからです。

本日のブループラネット賞受賞記念講演会では、リオに於て話し合わせ、フォローアップが今必要だと思われる5つのテーマについて特にお話したいと思います。これらは、IIEDが近年経験してきた問題であり、今後も我々が取り組んでいこうとしている問題に関係のあるものです。この講演会は、皆さんと共にこれらの問題を考えられる、素晴らしい機会であると思っています。

まず、初めての国際環境会議であった1972年のストックホルム会議の頃に比べると、環境問題に対する人々の関心が、近年比べものにならない位高まっているということを挙げたいと思います。1970年代には、経済学者や外交官、そして多くの政治家達も環境問題の重要性を認識してはおりませんでした。けれども、今では全然認識が違います。ストックホルム会議における、先進国と貧しい国々の当時の対話は、お互いの主張に全く耳を傾けないというものでした。先進国は、汚染とその規制のための国際基準を設定することに関心があり、資源の管理・抑制には無関心、そして貧しい国々はとにかく、汚染やその他の何を犠牲にしても、まず自国の発展を望んでいました。当時、社会主義の国々は、同様の問題を抱えている事を認めず、参加すらしていません。

しかし、1992年までに人々の意見や態度は劇的なまでに変化しました・・・リオで行われた環境会議が、それ以前の多くの発展の為の会議よりも、より現実味をおびたものとなったまでに。そのスケールと内容の多様性は前代未聞といえるもので、多くの人を呆然とさせてしまうほどでした。このスケールで環境と発展の問題を同時に討論しようという試みは大変素晴らしく、かつ前向きなことであり、その実現の多くはNGOの人々に負うところであります。ここで忘れてはならないのは、人々、特に貧しい人々の場合、彼らの食糧は結局大自然にまかなわれているのだということです。現在、各国政府、企業、外交官そしてその他の多くの機関や団体には、共通のコンセンサスがあります。我々が経済的に長期にわたって生き残るためには、自然保護と、その恵みの貯蓄が条件となってきたのです。我々は、この新しい概念を、過小評価してはいけませんし、また当然のことと受け止めてしまってもいけません。この概念は、常に新しい情報と教育で育てて行かなくてはならないものなのです。しかし、いずれにしてもここまで来られたことは大変な進歩であると考えております。

現在の重要課題は、最小限のコストで、できるだけ多くの人々のための持続可能な発展の実現にむけて、効果的な環境対策と経済計画を統合するということです。この作業はリオで始まったばかりです。国連環境開発会議では、世界の持続性を高めるために複雑かつ広範囲にわたる検討事項・・・ショッピングリストと言ってもいい位なのですが・・・が打ち出され、それはアジェンダ21 (Agenda 21) と名付けられました。アジェンダ21は、とりたてて面白い読み物とはいえませんが、大変内容の充実したものになっております。これまで、これほど多くの重要なテーマが、これほど多くの文化や様々な分野の関係者の合意のもとに、この様に素晴らしい形でまとめられたことはかつてなかったことです。しかし、アジェンダ21はテーマに優先順位をつけておりません。全ての重要な事項を羅列しているにすぎないのです。

我々は、国連と国際的なシステムがこうした多くの課題の重圧で崩壊しないように、優先順位を決めなければなりません。優先順位を決めるのは政治ですが、我々は政治的プロセスとともに正確な経済分析も、必要になってくると思っています。様々な行動に伴う利害得失はなにか？様々な環境と開発のためのニーズを、民間部門やNGO、そして地域社会が成し得る行動に結びつけるにはどうすればよいのか？我々の課題



は、経済と自然科学、応用化学を駆使してこれらの経費を計算し、優先順位を決め、環境活動によって経済的な報酬が得られる様なシステムを考え、そして問題の解決策を練るということです。規則（規制）だけではなく、経済が関わってこないと効果をあげることはできないのです。経済協力開発機構（OECD）の衛生環境規制と呼ばれているプログラムでは、理論上の生命一つを救う為に何十億という金額が費やされているというのに、第三世界で切実に必要とされている1ドルや2ドルのお金がないとは、なんと馬鹿げたことでしょうか。我々は、これらのことにきちんと順位をつけ、そしてその順位を裏付けるための研究や分析などの手段を必要としています。これらの手段の中で、環境経済がキーを握っています。

環境と発展という概念を考えると、我々は民間部門の活動にあまりよい印象がありません。あまりにも多くの環境団体が、マルチナショナルな民間部門に敵対し、活動の大部分を妨げ、問題を引き起こす原因だとして責めたてるために多くの投資をしているのです。しかし、我々とリオの橋渡しをしてくれた「持続可能な開発のためのビジネスカウンスル」（Business Council for Sustainable Development）は、大変前向きな団体でした。Changing Course（変化への道）という、世界の主な企業の実践例を集めた本の編集に協力していた時に、我々は変化を受け入れ、問題の解決に少しでも役に立ちたいという多くの人々の存在を知りました。民間部門が“持続可能な発展”をより高いレベルで実践するためには、かなりの努力を重ねなくてはならないことは明白です。我々はそのことを知っているのです。しかし、我々は民間部門と、彼らの活動を必要としています。政府や非営利団体は、貧困の救済のために財貨やサービスを産み出したり、あるいは基本的なニーズをそろえたりはしません。誰が水を供給してくれるのか？民間部門です！誰が食糧を供給してくれるのか？民間部門です！誰が家を建ててくれるのか？それは民間部門なのです！アジェンダ21では、アントレプレナー（企業家、しばしばビジネスに大成功した者のことを言います）が、ニーズの提供において重要な役割を担っていることが繰り返し述べられています。より多くの人々が協力するべき時が来たのです。

貧困の問題を打開するためにはまず、景気の上げ下げを都市及び地方の貧しい人々にも還元してくれる多くの媒介者が必要です。巨大企業をスポンサーとする、財団がそのスタートです・・・本日我々をここへ招いて下さった旭硝子財団を含め、世界中の彼らの業績をご覧下さい。また、別のステップとして大企業には、中小企業が環境にやさしい技術を開発できるよう手助けして頂きたいものです・・・企業版ゆりかごからお墓まで、ですね。企業のリーダーシップはこれらのことの他に、地域社会の抱える問題に対しても発揮して頂きたいものです。今までは、教育及び社会ニーズのために発揮されてきましたが、今度はそれを環境と発展のために発揮して頂きたいのです。リオでの会議ではマーケット・アプローチが取り入れられました。それに対してマーケットのリーダー達には、環境と貧困の問題解決のためのニーズについて考えてほしいものです。

環境と発展の問題は、その計画及び実践に際しては、非常に長期的な視野をもって問題に取り組んで行きます。しかし、人間のスキルの未熟さから、あまりにもよくある事なのですが、その実践は確実性を欠いてしまいがちなものです。機関も団体も、まだこの問題に取り組んで行くための準備ができていないのです。我々は、人間の環境活動に関するスキルを磨く必要を感じています。それは、トレーニングとスキルの移転を意味します。組織やマネジメントのスキルアップは時間を要するので、それは長期的な努力を意味します。コンクリート舗装や、物質的な資本に投下される額に比べて、人間のトレーニングのためには、あまりにも少ない額しか投資されていないのが現状です。

リオでは、世界の資源に対する人類全体の管理能力について、大胆な仮定をしておりましたが、資源の管理者の大半は今、壊滅的な崩壊と完全な枯渇の間を綱渡りしているのが現状です。あまりにも少数の人々しか、この混乱を管理しようという努力をしておりません。都市はめちゃくちゃな位に膨張して行く反面、地方行政への投資をする人は殆どいません。我々の経済システムはでたらめに資源を使い、汚染物質を吐き出します。ここでも、本当にひとにぎりの人しか、エネルギーや水資源の管理、資源のリサイクル、土壌の保護をしません。混乱や不確実性の中で日々生きている貧しい人々のスキルと我慢強さは、驚きに値します。しかし、汚染の拡大と環境のストレスが高まることによって事態が悪化するにつれ、彼らは努力することをやめるでしょう。我々が、よいアイデアを全て実行に移せる位、実践能力を高めなければ、我々は単に話すことだけで自己満足している者にすぎなくなってしまいます。例えば、リオで要求された国際的な“持続可能な発展プラン”を立てるためには、多くの知識と、それを統合する力を兼ね備えた企画技術を必要とし

ます。我々は、今、持続性という言葉が持ついろいろな概念に沿って、現在持っている手段をどの様に使ったらよいかを指導することも含め、人々をトレーニングすることに投資しなければなりません。人々の能力を高めることを優先すべきです。

最後に、国際的にみて階級の底辺にいる人々についてお話したいと思います。非常に貧しい人々と、彼らの生活する都市と地方の社会についてです。IIEDは、地域社会からの改革——下層の人々の生活レベルの引き上げ——を、トッパーダウンというプロセス、フレームワークによって実現できると信じています。我々は、これを初歩的な環境ケア（PEC、Primary Environmental Care）と呼んでいます。

PECには、非常にシンプルな基本概念が三つあります。

- 地域社会の力、権限の拡大
- 基本ニーズ（生活のための最低限のニーズ）の供給
- 自然保護

リオでの会議も、アジェンダ21もこの三項目及び、地域社会からの改革ということの重要性について何度も言及しておりました。これは、このプロセスを主張した者にとっての勝利でした。しかし、果たしてどれだけの国々が、市民に自らのケアをするように力づけることができるのでしょうか。いったいどれだけの国々が、政府機能の分散、公平な土地所有、オープンで参加しやすい企画プロセス、女性の地位向上などのために闘えるのでしょうか。IIEDは、第三世界におけるこれらの問題処理については、豊富な経験があります。我々は貧しい人々に力を与えることによって、好結果を獲得してきました。砂漠は実り多い地となり、木や森が再生され、やせた土地も豊かな地となり、住居と水が供給されました。どうやってこれらの事は成し遂げられたのでしょうか？人々にものごとを取り仕切る権利を、彼らの未来に希望を、彼らの努力に報酬を、環境に関する知識を与えたことから、それらが可能になったのです。簡単に聞こえるかも知れませんが、これらのことを行うには忍耐と責任感、そして人を信じる、という姿勢が必要なのです。

国連環境開発会議には陪審員はおらず、我々はそれが成功だったか失敗だったかを早計に決めることはできませんが、好ましいスタートであったとは言えると思います。リオでの成果が前向きな行動に結びつけられてゆくことによって、未来は明るくなるものと我々は信じております。

IIEDは、今後も以下の5つの項目の実現への協力を通して、その明るい未来の一部となってゆくつもりです。

- 大衆に環境に関する情報を提供し、知識を与える。
- 経済をもっと、環境活動に対する報酬の提供も含め、環境のためになるものにつくりかえる。
- 民間部門にも問題解決に参加してもらう。
- 人間の能力向上のために投資する。
- 地域社会からの改革を推し進める。

政府、NGO、そして学界が、この方向で政策を進めれば、貧困と環境の問題についての答えは、我々の生存中に得られるでしょう。もしも、この方向で進まなければ、心配性で内向的な環境保護者が出現し、貧富の差の激しい世界となってしまおうでしょう。我々の子供達への借りを、そんな世界で返そうというのは、申し訳ないのではないのでしょうか。